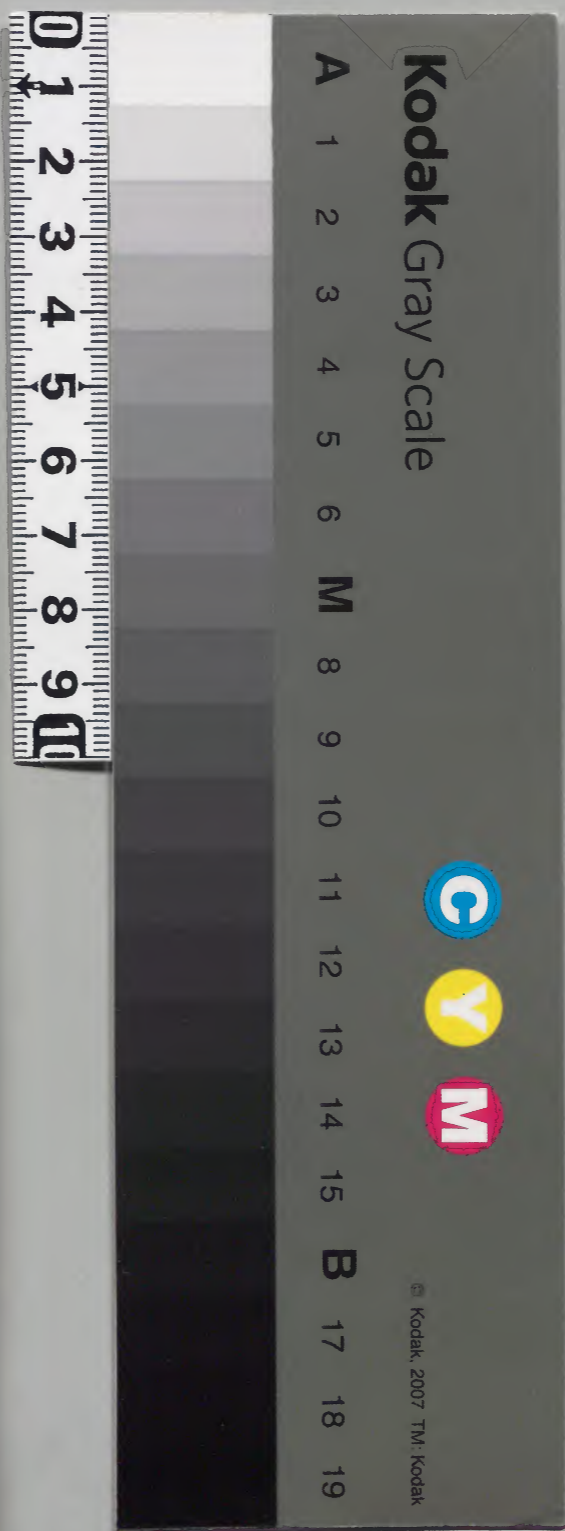


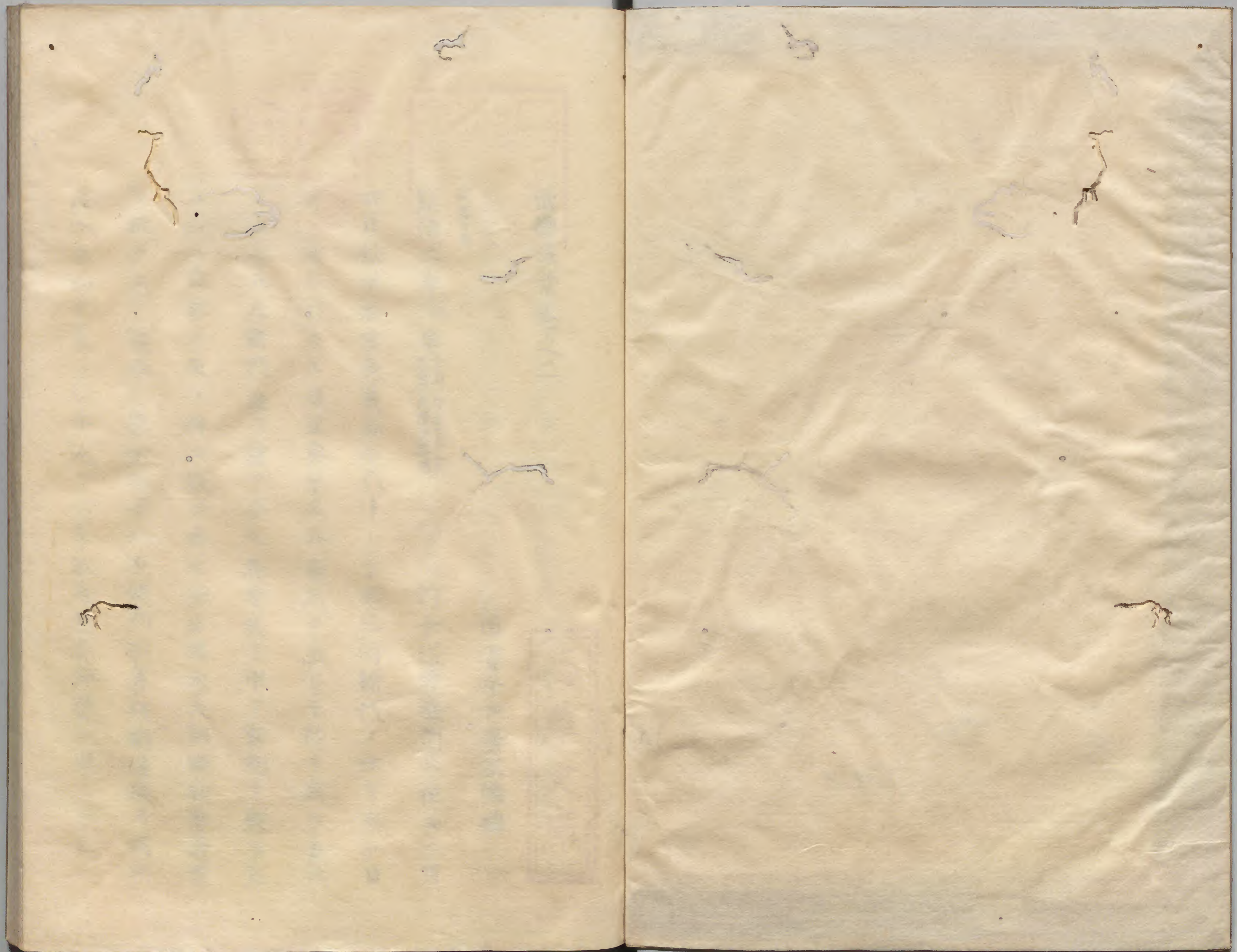
武德成業

二

内閣文庫	
番號	和 15251
冊數	63 (2)
函號	150 12

内閣文庫		
函	五二九一	和
架	六三	書
冊	四	類





武徳成業卷之二

弘治二年

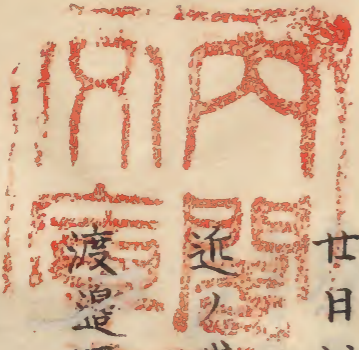
丙辰

皇朝ハ後奈良院
武家ハ光源院義輝

竹千代君駿州ニ在ス二月

伯耆守加藤正脩編

淺草文庫



廿日松平右京亮義春名代トシテ西三河譜代ノ士ヲ卒テ日
近ノ城ヲ攻ラル城主奥平久兵衛兵ヲ出シテ防キ戦フ吾兵
渡邊源五九衛門進テ鎗ヲ合ス義春矢ニ中テ重創ヲ被ラル

日既ニ黄昏ニ及フ將士戦ヒ疲ル平岩權太夫同彌助等義春
ヲ扶テ退ク義春ノ家士松平八右衛門同善兵衛後殿ス城兵
後ヘヲ蹈テ来ル松平返リ討事數度義春陣營ニ還リテ死ス

義春ハ長親君ノ第四ノ子元ノ名ハ甚太郎東條ト号ス

君其赴ケテ聞召テ悲涙滴テ股肱ヲ失フ事ヲ歎キ玉フ聞者

皆感動ス嗣子家忠尚幼シ家臣松井九近忠次忠勇ノ譽レテ

リ且家忠ノ縁類タリ故ニ忠次ヲシテ家忠ヲ守立シメ東條

ノ兵ヲ司トラシム松井屢戦功有後ニ麾下ニ仕テ姓名ヲ賜

テ松平周防守康親ト稱ス

弘治二年丙辰 皇朝ハ後柏原院 義輝春竹十代君駿州ニ在

テ元服ヲ加エサセ給フテ次郎三郎元信ト申奉ル今

川義元媒妁トシテ關口刑部少輔義廣ノ女ヲ嫁リ給フ築

山殿ト號ス關口一瀬名氏ト号ス今川ノ族也義廣ノ妻ハ義元ノ妹ニリ或曰義元ノ始也三河ノ諸士駿府ニ至

テ賀シ奉ル柳原某カ獻スル處ノ良馬駿逸絶羣也嵐鹿毛

大神君是ヲ柳營ニ獻シ給フ義輝公大ニ悦テ手書及短刀ヲ

贈リ給フ

家忠日記

同年二月尾州ノ士三分カ一今川義元ニ志ヲ通シ知多郡ノ

弱兵等ハ過半降参メ降人ト成テ義元ニ屬メ城々ヲ避ケ渡

ノ間品野ノ城ニハ三洲ノ士松平勘四郎信一後伊豆守笠寺

ノ城ハ今川カ兵葛山備中守及三浦九馬助飯尾豊前守淺井

小四郎等ヲシテ守ラシム

竹下代君十二一十三此清時清具是法名初とを於十六此御歳後府

法成申ふあつて清元後法持清名と
我人元康公と法成

多如今川家来園に刑部とりの人の法塔小法為成是と云

我元法正中しりり是法乃法清代元悦事不斜我元

法作小尚年より是法法城(正移り由家中法領法流

事法正法正と作付らり極よの法なり
元康公

中名初少法時より唯今小玉り法く由女抱小形り法小

是法法城(由系法法城)と云るは法一方ありす由法恩之

法元圓小但せ是法(法元法法法法我未年若くは法と

二法九小法立層くは法中九小小山田初法事(法元法法

法元法法法法事(法元法法法法法法法法法法法法法法法法

法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法

法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法

法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法

法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法

法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法

法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法
廣忠好生少て法法

法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法
法元法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法法

とらり

武徳大成

大神君十五歳ニテ始テ岡崎ニ歸ラシメ給フ譜代舊恩ノ士
 遠近欣喜シテ迎へ奉リテ拜趨ス鳥居伊賀守忠吉進テ御手
 ヲ取テ中ケルハ某老羸テ走廻ノ役ニハ立難キ故ニ土藏ヲ
 多ク構エテ潜ニ兵糧ヲ儲ヘ置吾
 君ノ善士ヲ多ク集
 メテ威名ヲ四方ニ振ハセ玉シ事ヲ冀申ス年老生残りテ吾
 君ノ一度此城主ト成ラセ給ハレヲ見奉ラシ事生前ノ大慶
 何ヲ以カ是ニ加ントテ涙ヲ流シテ止ス
 君モ又感動
 シ玉フ

感狀記

尾張ノ國主織田上總次信長ハ美濃ノ國主齋藤山城守道三
 ト地ヲ争ヒテ相戦エ氏常ニ克ス信長是ヲ憂テ道三ノ君臣
 ヲ離スヘキ謀ヲソ運ラサレケル先西家老ニ就テ使者ヲ遣
 シ我ハ道三ノ敵ニ非ス道三ノ濃姫ヲ我ニユルサレハ嫁娶
 ヲ調テ旗下ニ屬シ難ニヲモムキ危キヲ救フヘシト云送ラ
 レケレハ道三同心セラル信長濃姫ヲ迎テ後一年程過テ濃
 姫ヲ熟睡スルヲ伺ヒテ密ニ興テ外ニ出曉ニ至リテ歸ル
 一月ハカリ也濃姫是ヲ怪テ君忍テ心ヲ通ハシ給フ者アラ
 ハアラハニノ玉ヘ何ソ身ヲ窺シテ深クツマセ給フソヤ

妾イサ、カ妬ム心ハ侍ラス物ヲ此頃ノ御氣色不審コソト
恨ミ顔ナレハ信長イヤ去事ニアラス我一ツノ秘計有我ノ
之知リテ人ニ知スヘキ事ニアラ子ハ疑ハル、理リ也トテ
又前ノ如クスル一月計濃姫怪テ是ヲ問テヤマス信長夫
婦ノ情ハ浅カラ子氏匿スヘキヲ隱サ、レハ事泄テ謀策調
ラスサレハ口ヲ噤モケニ隔アルニ似タリト打ワヒタル體
ナレハ濃姫是程ニ心置シ參ラセシトモ兼テハ知ラサリケ
ルコソ女心ノ愚サナレ古サレヌヘキカコトソト今思ヘ氏
云甲斐ナシ御志ノ厚カラシ方ヲ是ニハスエサセ給ヘ妾ハ

イツチニモ出テイナハヤト涙ヲ流シテカコチカクレハ信
長モセン方ナキ體ニモテナシ城州ト我トハ深キ仇ナリ一
旦和團シタルハ我本意ニ非ス城州ノ両家老我ト心ヲ合セ
城州ヲ殺害シ子丑ノ間ニ火ヲ揚クヘシト固ク約束シタリ
シカ早五六十日ニ及ンテ毎夜星ヲイタ、キ霜ヲ履テ是ヲ
ノソメトモ未揚ラサレハ定テ其便リヲ不得ナラニ火ノ揚
ルト均ク軍兵ヲ率シテ美濃ニ亂入テ其地ヲ取ルヘシ穴賢
口ヨリ出ス事ハサテ置ヌ心ニモ思フヘカラストテ濃姫ノ
方ヨリノ使モ文モ守者ヲ付テ止ラレヌ両家老ニハ屢使ヲ

遣シ文ヲ送リテ人ノ疑ヒヲ起サシム尾張ノ將士ニハ深夜
俄ニ師アラレ用意シテ下知ヲ待テト令セラル道三尾張ニ
入置タル間者は告ク道三何事ナラント思フ所ニ五七日
過テ守者イツワリテ少緩弛ス濃姫其隙ヲウカ、ヒ具ニ右
ノ事ヲ書テ告タリケレハ道三怒リテ両家老ヲ斬罪ニ行ハ
ル是ヨリ道三ノ鋒稍衰ヌ

齋藤山城守道三先手ノ兵士ニ三間柄ノ直鎗ヲ持セ鎗ノ樽
ノキワヲ繩ニテ結ヒ手カ、リニシ鎗前ニ成テハ人々是ヲ
カタケ上ヨリヲロシカケ叩立レハ身方ハ乍上鎗ニナリテ

歎ハ自ラ仰形ニナル仰形ニナリテハ蹈止メラレヌ者ナレ
ハ多ハ是ヲ以テ衝崩シ勝利ヲ得タリ

齋藤道三ハ美濃ノ土岐ニ仕へメ小身ニシテ町ハワレ草
庵ニ居レリ内窄ケレハ鎗ヲ掛置ヘキ所ナシ門外ニ竹ヲ立
節ヲヌキテ鎗ヲ其中ニ入シ口ヲ封シテ雨露ヲフセク土岐
放鷹ニ出ラレタルニ鷹此竹ノ枝ニ居カ、リタリ怪ミテ故
ヲ問ル、ニ道三實ヲ以テ對フ土岐感稱シテ心懸ノ士トス
擧用ヒテ試ルニ才智勇謀アリテ將ノ器ニ當シハ後漸歷上
リテ國ノ執權トナル是ニ於テ叛心ヲ起シ土岐ヲ楯出シテ

美濃ヲ押領ス道三ノ嫡子ヲ義龍ト云道三其家臣稲葉伊豫
守カ妹ヲ夫人トス豔容比スヘキモノナシ然レ氏頑キ一六
尺ハカリ義龍其腹ニ生レタルヲ以ノ故カ長六尺四五寸膝
ヲカ、メテ座セル所其膝ノ高サ一尺二寸ノ扇ヲ立雙ルニ
未及サルヲ手一束ハカリ也臂力人ニ超勇銳倫ヲ絶ツ外顔
ハ蠢愚頑冥ナルカ如クニテ内心ハ實ニ穎悟明朗ナリ暗ニ
人情ヲ察シ密ニ時勢ヲ計リテ能勘辨ス道三ノ愛妾ノ腹ニ
二男子アリ喜平次孫四郎ト云道三義龍ヲ以テ嗣トスルニ
足ラストシテ是ヲ疏シシ是ヲ遠ク義龍ヲ退ケテ喜平治ヲ

立ント欲ス義龍是ヲ曉リ義龍ハ内城ニ居リ道三八牙城ニ
居ル義龍家老大臣ヲナツケ士ニ下リ卒ヲ撫テ大ニ人心ヲ
得タリ伊賀伊賀守一ツノ姓ハ安藤竹腰攝津守後剃髮シテ
道喜ト云稲葉伊豫守後剃髮シテ一徹ト云氏江ト仙四將皆
義龍ニ服従ス其機ヲ計リテ外叔父ナレハ先稲葉ニ密談シ
イツワリテ病ト稱シ稲葉ト懇切ナル醫ヲ近付テ誓紙ヲ書
セ其藥ヲ服シ病マズ々重クナリテ愈カタシト云ハシム喜
平治孫四郎元來不和ナレハ問訊スルニ及ハス稲葉二弟ヲ
諫メテ義龍ノ病日ヲ逐ヒ月ニ從テ疲レ衰又正ク二公ノ兄

ニアラスヤ其死期ヲ問ハサルハ不義ナリ不親ナリ義龍死
セハ二公美濃ヲ分テ領セン不義不親ノ名一タヒ歿セハ後
其汚名ヲ補苴スヘカラス外人ハ不懼家臣ハ不服外人不懼
家臣服セサルハ危殆ノ道也主將ノ器ヲ論スルニ信仁ト説
候ハスヤ義ト信トハ寔ニ士庶人ノ心ヲ歸スルトコロナレ
ハ二公美濃ヲタモナテ威ヲ歆國ニ奮ハント思召サハ必義
龍ヲ問給ヘト云喜平治孫四郎諫諭ノ理ニアタルカ故ニ許
諾シテ明日病ヲ問ハントス稲葉カクト義龍ニ告ク仕手ヲ
日根野ト云壯士ニ令ス美濃一國ニカクレナキ有勳刀ト名

クル大物キレヲ日根野ニアタヘテ二弟ヲ殺ス早鐘ヲ搗テ
内通ノ者ニ示スニ牙城ニ聞テ夥シ將士常ニ牙城ニ至テ道
三夜話ヲ好ニテ鷄鳴漏盡ルニ及フ多シ此時侍座ノ者共
大ニ驚ク道三是ハ義龍カ反スルナラント云將士各道三ニ
與セシカ義龍ニ從ハシカト云處ニ一老臣ノ曰道三八虎質
狼心殺ヲ嗜ノ殘夫也義龍ハ宏知達才下ヲ愛スルノ明主也
是面々ノ能知ルトコロナレハ何ヲカ疑ハントテ義龍ニ歸
スル者ハ一萬餘道三ニ屬スル者ハ二十計也義龍ハ子タレ
ヲ以テ道三ヲ攻ス道三八兵寡キカ故ニ義龍ヲ撃ス相待テ

居タリケルカ道三牙城ヲ危トヤ思ハレケニ是ヨリ一里半
ヲ去テ地ノ理ヲ得タル一邑有此ニ出テ陣ヲ張ルカクテ其
月モ夕チニケリ義龍侍臣ニ向ヒテ道三サヘ我ヲ害スル心
ナクハ元ヨリ我攻戰ヲ好マスツイニ干戈ヲ止テ和順ニコ
ソナルヘケレトテ悦ハレケルカ道三鬱憤サラニ解カタク
テ明日義龍ヲ伐ヘキニソ定リケル義龍聞テ城外ニ出テ兵
ヲ陳子テ是ヲ待道三八二十計ヲ率テ一陣二陣ヲ切崩スト
云ヘ氏義龍ノ中備後備左右旗本少モ列ヲ亂サス奇正ヲ整
テ靜ニ進ム道三是ヲ見テ義龍ハ未夕軍旅ニ鍊サル者也先

手敗セハ備ミタリニ成テ必スソ、ロニ打テカ、ラン然ラ
ハ追糜ケ輒ク擒ニセント思フ處ニ義龍カ師ヲ指揮スルテ
イ老功ノ者モ及フヘカラス我今日討死ニ極タリ去ナカラ
隣國ノ主義龍ヲ侵ス者ナクシテ美濃ハ全ク齋藤家ノ有タ
ルヘシ是我死テモ怨ナシ我始ヨリ義龍ヲ惡ムニアラス我
其器量ヲ見知ラサルハ不明也庶子ニカエントセシハ家ノ
爲ソト思ナカラ不順ナリトテ大息ヲ續テ控エタル處ニ義
龍ニノ身ヲ打始メ敗シタル一陣二陣モ旗ヲ返セハ道三ノ
兵夕チマナ潰亂ス兵又未交サルサキニ義龍將士ニ向ヒテ

汝等今日道三ニ遇ハ如何スヘキヤト問レケルニ將士應フ
ル詞ナシ其頃永井忠右衛門ト云大剛ノ者有鎗前ニ至リテ
勇ナル者進メハ備枚ナリニ成ルナラヒナリ永井何時モ枚
ナリノ先ニアリテ一二番ヲ争フ故ニ時ノ人永井ヲ謂テ枚
先ト號ス枚先道三ニ敵對仕ラレハ臣忍ヒサルトコロア
リ恐ナカラ生捕奉ラニ父子ハ元來至親ナリ然ラハ即一旦
寇讐ノ如クナリトモ御憤悉ク解テ本ノ至親ノ中トナラセ
玉フヘシ臣不肖ナカラ御盃ノ挨拶ヲ仕リ道三御隱居有テ
君公孝養ヲ遂サセ給ハ、禍轉シテ福トナラント云義龍悦

ヘリ道三例ノ黒具足ニ出立レタレハナトカハ見マカフヘ
キ枚先ツト馳寄テ臣少モ害心ナシイサ義龍ノ陣ニ御入候
ヘ御和睦ヲ申ナシ候ヘシト云ヘハ道三サハ云ハセシトテ
鎌鎗ヲ以テ突ル、處ヲ鎗ノ下ヲク、リ入テ生捕タリ然ル
ニ小牧源太後ロヨリ走り来テアヘナク道三ノ両股ヲ切落
シ枚先ヲ推ノケ首ヲ取枚先是非ナク鼻ヲ截テ持歸リテ憂
フル色アリ小牧程ナク来リテ道三ノ首ヲ義龍ニサ、ク始
メ枚先カ生捕奉ラント云ヒシ時小牧傍ヨリ只臣ハ御首ヲ
給ラント云ケルヲ枚先無道ナルナ申サレソト戒ケレヒ

小牧其詞ヲ違ヘシトカクハシタル也義龍杵先ヲ呼テアシ
ハ如何ニト問レケレハ杵先涙ヲ流シ彼若者思慮ナキ仕方
言語ニ絶タリ臣カ本意達セスシテ云ヒ甲斐ナキニ候生
捕奉ラント申セシ印ニハ御鼻ヲ截テ是ニ候ト鼻紙入ヨリ
取出シ義龍ノ前ニ差置是モ又罪戾道シ難ク候へ共武士ハ
詞ノ違フヲ永代ノ耻ニ仕リ候臣一人ハ耻辱ヲモ忍フヘク
候得共臣カ同姓親族ノ面ヲ穢スニ似タレハ止事ヲ得ス候
首尾ハ爾々ニ候ト申セハ小牧閉ロス是ヨリ杵先髮ヲ断テ
高野ニ赴ク信長ハ道三ノ婿ナルニヨツテ師ヲ蔑シテ弔合

戦ヲセント欲ス義龍是ヲ聞テ美濃ノ國中尾張ヨリノ通路
ハ道ヲ作ラセ橋ヲ掛サセ信長我ヲ討ントナラハ平場ニ引
受テコ、ロヨク有無ノ防戦ヲトケ無事ニハ尾張へ歸サシ
トアサ笑テソ居ラレケル信長氣ヲヤ吞レケン已ニ打出タ
ル師ヲ旋シテ戦ヲ止メラレヌ義龍ノ時美濃能治リテ士懷
キ民樂メリ嗣子龍興ノ代ニ至テ小牧源太野木治九衛門両
軍權ヲ争フ冬ノ日爐邊ニ坐ス小牧爐中ニサシ入テ火ヲカ
キヲコス處ヲ野木上ニ乗カ、リ小牧ヲ斬ル小牧短刀ヲヌ
キアケサマニ野木ヲ刺テ両臣立トコロニ死ス龍興生質暗

弱ナリ両臣ノカニヨリテ敵ノ為ニ侵サレス両臣死テ後ニ
毎戦ニ利ヲ失ヒテツイニ信長ニ亡サレヌ
齋藤龍興ノ臣竹中半兵衛一萬石ヲ領シテ西美濃菩提ノ城
ヲ守ル沈勇温毅ニシテ人其才器アルヲ知ラス三老臣安
藤氏江不破等侮之竹中憤リヲ含ミテ二老臣ヲ殺サシ
計ル其頃竹中カ弟半平龍興ニ愛幸セラル竹中願クハ城中
ニハ半平カ家宅ヲ造リテ食浴ノ間モ猶不怠侍ノ奉公ヲ
勤メサセハヤト申請ケレハ龍興即其望ヲ許サル於是竹中
勇士二百計ヲ傭役ノ體ニシナシ三老臣ノ一坐ニ會スルヲ

待テ其坐ニツト入テ先一人ヲ午ノ下ニ斬リ二人驚ク處ヲ
又二人ヲモ斬斃ス傭役ツト思タル者共イツクニカ隠シ置
ケン面々鎗刀ヲ取テ城ヲ守リ門ヲ固ム竹中龍興ノ前ニ參
リテ臣更ニ謀叛ヲ企テ候ニアラス只三老臣カ驕奢ヲ惡シ
テ君公ニ代テ誅ヲ行ヒタルニ候恐ナカラ此城ヲ御出候ヘ
事靜リテ後可奉迎候トソ申ケル龍興力ニ不及城ヲ出サレ
竹中遂ニ城ニ據リケレハ齋藤家ノ士卒多クハ竹中ニ歸
ス竹中後ニ龍興ヲ迎ヘ已レ相將ノ任ニ處テ權勢日々ニ盛
ン也信長竹中カ龍興ヲ逐フト聞テ速ニ龍興ヲ殺セ美濃全

州ハ貴殿ニ與フルツト以使云ヒ遣シケレハ竹中不悅我素
ヨリ龍興ニ叛クニアラス一旦家臣ノ罪ヲ匿タルノミナリ
トテサシテ返答モセサリケリ竹中カ存生ノ間信長敢テ美
濃ヲ侵サス竹中三拾六歳ニシテ病テ死スキツカラ斬首捕
虜ノ戦功一度モナシ然レモ文教武策盡ク竹中ニ決シテ人
々其知ニ服セリ間暇アル時ハ常ニ好シテ書ヲ讀ム其器量
甚世人ニ超タリ

信長美濃ヲ取テ其勇強知謀ノ名アル者ヲ扶持セラル美濃
先鋒衆ト云フ其中ニ稻葉氏江安藤ヲ勝レタリトス稻葉ハ

又其最一ト稱セリ信長紀伊ノ雜賀孫一郎同若丸衛門兄弟
ニ説テ降ラシメントス使ヲ遣ルニ使帰ラス其殺サル、ヤ
留ラル、ヤノ間未分明ナラス信長重テ稻葉伊豫守ニ命ス
稻葉即チ彼地ニ往テ孫一郎若丸衛門ハ信長ニ降り尾張ニ
來テ幕下ニ屬スノ禮ヲナス此時信長孫一郎ニ問テ曰ハシ
メノ使如何孫一郎カ曰臣是ヲ殺ス信長ノ曰何ンカ故ニコ
トヲ殺スヤ孫一郎カ曰其人騎歩多ク引ツレ兼テ案内ヲモ
通セス馬ニ乗ナカラ俄ニ城門ヲ叩キ信長ノ使ト稱シテ言
誇リ色驕シリ謀テ臣ヲ擒殺セントスル者也ト思ヒ本丸ト

小向く白井川ゆく戦死を其子小左衛門利定秀吉

小住く井上氏に及びし 言僅小
五百石

武徳大成

九月

後奈良院崩ス

十月

正親町院踐祚明年元ヲ永禄ト改ラル

永禄元 戊

午 皇朝ハ正親町院義輝

今川義元申サル、ハ西三河ハ

大神君累代ノ領國也然レトモ士族尾州ノ織田氏ニ組スル者多シ何ソ邦内ヲセメタイラケ舊功ノ士ニアタヘラレサ

ルヤト有ケレハ 武徳大成 大神君大ニヨロコンテ二月駿府ヲ
發シテ岡崎ニカエラシメタマウ親戚譜代ノトモカラ命ヲ
下タスレテ馳アツマル者擧テカソフヘカラスコノコロ寺
部ノ城主鈴木日向守今川氏ヲソムヒテ吉良義昭ト相通シ
テ織田氏ニ屬ス依之先鈴木ヲ討ントテ寺部ニ軍ヲ出シ給
フ酒井石川先鋒トシテ軍ヲ指揮シテ急ニ攻ム城兵モ又能
勝戦フ本多作左衛門重次第九藏重玄先登シテ攻入重次敵
二人ヲ斬テ創ヲ被テ出ツ重玄進ミ戦テ止ス遂ニ戦死ス城
兵本多カ勇ヲ感シテ重玄カ首ヲ遺ル其頭ニ疵十三ヶ所有

見ル者驚テ惜メリ松平次郎右衛門重吉苦戦シテ創ヲ被ル
次男半彌助或ハ般重茂及家士名倉惣助等戦死ス吾兵彌奮
激シテ攻討遂ニ戦勝テ北ルヲ追テ首ヲ斬ル事百餘級火ヲ
郭外ニ放ナテ武威ヲ輝カシテ帰陣セラル今川義元軍功ヲ
褒ミテ太刀ヲ贈ラル又重吉カ功勞ヲ賞ミテ書ヲ與テ米地
ヲ加フ我軍又廣瀬ノ城ヲ攻ム廣瀬ノ城ハ織田守ノ部信長
大神君ノ岡崎ニ來ルト聞テ境ノ城ニ兵ヲ加卫テ守ラシム
我軍既ニ廣瀬ノ城ニ押寄レハ尾州ノ援兵城外ニ出テ是ヲ
防ク津田兵庫神戸甚七先達テ進ム大久保七郎右衛門忠世

津田ヲ討テ其首級ヲ得タリ江原某神戸ト相戦フ江原カ家
丁神戸ヲ突殺ス城兵敗シ走ル我兵大ニ叫テ進テ城壘ニ逼
ル松平玄蕃清喜同勘解由衆軍ヲ指揮シテ曰此地ハ左右皆
敵寨也深入スヘカラストテ兵ヲ収テ退ク事十町計ニシテ
嚴敷備ヲ立テ見廻セハ寺部鈴木氏舉母板倉氏及丹家中嶋
等ノ城々兵ヲ出シ叱シ聚テ我軍ノ間ヲ伺ヒ討ントス石川
安藝守清兼進ンテ申テルハ吾君ノ諸軍兩日ノ捷軍大慶是
ヨリ大ナルハナシ勝ヲ保ツヘシ仕損スマシトテ叱ヲ整テ
旋ル頃アリテ又舉母梅坪伊保等ノ城ヲ攻ム既ニシテ水野

下野守信元ト石ヶ瀬ニ戦フ渡邊半藏守綱年十七奮戦テ功
アリ幾程モナクシテ 大神君駿州ニ赴セ給フ時ニ松

平監物家次科野ノ城ニ據守ル信長兵ヲ殺シテ是ヲ圍メ附

城ヲ築テ日夜攻撃家次能防三月七日家次附城ニ夜討ス敵

兵驚駭テ離散ス家次勝ニ乘テ急ニ追討テ附城ノ將竹村孫

七郎磯田金平戸崎平九郎瀧山傳三郎及ヒ從士五十余人ヲ

討取テ其首級ヲ具テ駿府ニ獻ス 大神君家次力勇畧

ヲ善シ給フ今川義元氏真其功ヲ悦テ感書ヲ與テ褒賞セラ

ル

家忠日記

同年三月駿州ニ於テ 大神君ノ 長子 三郎 信康 誕生有

母堂ハ關口刑部大輔カ女依之駿州及參州ノ諸士群參シテ

是ヲ賀奉ル 大神君岡崎ノ城ニ歸リ給フ

落穂集

永祿二年 元康公初由河内領地ニ實入リ居伊

賀守河内法沙院ニ同入リ河内別名目ヲ給ハ

リケレハ之ニ由小換並ニ之ヲ給テ河内實領地高家

亦ハ之ニ由鳥目ヲ換ル之換ル由小換並ニ之ヲ給テ河内

換並ニ之由河内成子細之河内守少尉伊賀守法沙院

等ノ由之由河内成子細之河内守少尉伊賀守法沙院

不苦いなり小なるは色目と換ふゆ小後と云ふは松尾
のくさくさうりいふは如也堅くゆふ後と云ふは松尾
を潰しと云ふゆ痛く後ゆふは河軍用はゆふハ
色目小なり一あるは色目ゆふは色目小なり殺年ふらうけ
加次小なり一あるは色目ゆふは色目小なり河軍威のう
中徳のゆふは色目ゆふなり

武徳大成

項年駿州ノ今川氏富強ニシテ遠州参州率ヒ麾下ニ屬シ且
岡崎ノ兵屢尾参ノ戦ニ勝テ以テ軍勢大ニ振フ甲州武田相
州北條氏各和好ヲ求テ近隣慎服ス義元驕奢ノ心生シテ思

ラク軍ヲ尾州ニ出シテ織田氏ヲ滅シ濃州江州ヲ撃平ケ京
師ニ至テ天下ニ下知ヲナサント欲シテ駿州遠州ノ諸軍ヲ
催シテ尾州ニ出ントス信長是ヲ聞テ城砦ヲ要害ノ地ニ築
テ防守ノ謀ヲナス

武家閑談

信長より世を構へ大高松城と對峙と九丹家沖津
ゆふ水野常刀山古海老と松尾とゆふとゆふ松尾寺
ゆふ小のゆふ久向の京中ゆふ松尾ゆふ松尾川平尾ゆふ松尾
の陣ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾
ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾ゆふ松尾

米子丹波廣瀬城（後）に於て信長軍に對して曰る今川
方より大高相模（後）を糧と入（後）九根を才（後）先之
と申す早之具と云（後）と申す早之具と云（後）と申す早之具と云（後）
米子丹波廣瀬城（後）に於て信長軍に對して曰る今川
方より大高相模（後）を糧と入（後）九根を才（後）先之
と申す早之具と云（後）と申す早之具と云（後）と申す早之具と云（後）

武徳大成

山口故有テ信長ニ叛ク且又大高沓掛ノ西城ヲ誘テ同ク今
川ニ屬セシム於是義元鶴殿長持ヲシテ長持ハ義元ノ妹大高沓掛
ノ二城ニ據シメ岡部五郎兵衛鳴海ノ城ニ據居シ守ラシム
是ヨリ先達テ今川ノ部將葛山播磨守三浦左馬助飯尾豊前

守浅井小四郎等笠寺ノ城ニ據ル諸將相共ニ犄角シテ尾州
ノ諸將ト相拒ク大高ノ城兵糧乏シ鶴殿急ヲ駿州ニ告ク

武家閑談

義元之

檀現様近使と云大高相模（後）を糧と入

一と云ふ由りて永祿二年四月十日小大高相模（後）を糧
と入きんとて宵より之を夜山（後）と云ふを才（後）

酒井五郎正親後雅樂助小政（後）小政忠次後任左石川五七郎後任

信長兼（後）城（後）配（後）中（後）と云糧（後）入（後）

事（後）と云糧（後）入（後）と云（後）檀現様御年十八末

信長（後）別（後）と云（後）と云（後）と云（後）と云（後）と云（後）

此陳を用ひあり

落穂集

今夜大高を糧入し候少付て々他は是見とすなり及
て我等一好小信せ並きく危角に候中慮く
すは急度と作也



武家閑談

我次中少致せし宜し先緒とて松井左馬助親後酒井
左四郎正親石川左七郎親正亦曰ふ余とてんり
九日此夜中少致大高は城をも籠津九根は敵城と
て服小れり一宗越くち約は城へもせ
槍現様と

遣兵八百余少て高糧小高給子二百と引候も大高城の状

余町根小使あり

武徳大成

敵ノ間ヲ伺フテ糧ヲ城中ニ入レトス時ニ信長鳴海邊ニ
出テ城砦ヲ巡見ス我軍以謂信長糧道ヲ遮ラン為ニ出ツト
鳥居四郎左衛門内藤甚五左衛門義教同四郎左衛門正成石
川十郎左衛門秋浦藤次郎時勝同八郎五郎勝吉ヲシテ尾州
ノ兵ノ形勢ヲ見セシム五人皆曰敵兵嚴ク備エ待テ吾兵道
ヲ邀ラントス勝吉獨思ヘラク敵ハ戦ヲ待ス速ニ糧ヲ納メ
ラルヘシト鳥居内藤等カ曰秋浦敵ノ銳氣ヲ見スヤ何ソ胡
論ナルヲ申ソ勝吉イヤ々然ラス敵若戦ヲ欲セハ山上ノ

軍ヲ引テロスヘシ避テ去ル敵也少モ猶豫ナク糧ヲ入ラル
ヘシト申ケレハ 君叔浦カ言ヲ是ナリトシテ急ニ軍
士ヲ遣シテ寺部梅坪ノ兩城ニ向テ民屋ヲ放火シテ敵ヲ夕
ハカリ給フ

武家閑談

御先子此軍も自迎くは籠守津丸根をも不攻入り
桑かろ寺部此城へ丸をうり急小攻入信長方少は不
思ふ上へと下と也く此合防戦をえより九日此
西法刻の事あるは園さハく劇強城方を防給
伊先子此城一の木戸踏破り火をうり此と此に丸を

梅坪此城へ丸を二に此丸まで押入火をうり攻戦
その火此光天と輝く園中此響波り鉄炮此音也
これハ大言此城向城丸根籠守津此城と此河と見く
別城も此此城と此差並らるく真へ御入公も此丸
不審なり先寺部此城へ後法せのく大言表と
差並らるく此梅坪へ池向る 梅坪様を急と
伊先丸根籠守津五城より寺部梅坪へ後法小越く
此のやと均く急小攻入を振のひ小此此と押之此
障も此く急表と大言此城へ入の丸根籠守津五城より

是と見ゆといふも宗統は勝ハ皆寺部梅坪ノ後詔小
行所ハ如ハ苗ノ居斗ナレハ論方ナリ
槍頭棟
其思ハ其後小を糧と入のハ人数と凱と引九要害に
地小飯あり

落穂集

之内小沙先ハ其ノ既も人数を引揚来り候
元康公御覽ハ其申中ハ勅旨と打らるゝの在り
之沙先ハ石連引取之と作有られハ之既向て取し也
其後小ハ江阿波公先所旗本其人数を引九要害と
引小甲上られハ
元康公大沙之股打さるゝ也而

尚味を糧入之候之付てハ他其見小及を沙出陣前思
其作公と矢意に公也と其作小く之とハ丸角小及之既の
元沙先小立て其人数を引九要害より御馬と引入り候

武家閑談

九根就津西陣其も寺部梅坪より打つて大言其城ハ
其糧入り候事と其拍く等と其謀らるゝも其後と
後悔其れも甲斐也

武徳大成

義元又西三河ノ敵ヲ撃シム依之寺部梅坪廣瀬舉母伊保等
ノ城ヲ撃其獲所ノ地ヲ以テ有功ノ士ニ頒テ賜フ衆人欣々
トシテ相告テ曰乃祖 清康君ノ威風ニ相似リト稱セリ義

元大高ノ知勇ヲ稱シテ龍ノ種龍ヲ産トハ此
ナルヘシト申サレケル 君ノ

武家開談

此ノ所前出今日此所捕中するも申す疎少くは我亦在弱年か
軍中少生此三少ゆもかろひ三少及か花とも從ん小銃ひ
いよ
君今約を糧と大言此城入る事とも急き此ハ
よ先世先も出しつ大言此城をも余亦小凡然等津九根とも踏
我違へ奥此等約捕陣取論を攻せられ此ハい城此は更中て也と
やもくと大言(を糧を今小彼有是言凡更此不及知社好所)
津此奥意と水夜社社と管一回小中
槍現様此也い

さよこ是知安さこひさなり 然等津九根津取陣も大言
城へを糧入と防んぬ此も尚やとるも与約捕陣此城
より後話とるを杉み居より今約家若大言(を糧を入
んとせハ九根然等津小貝と云) 寺約捕陣此城貝
とゆつと人言表(此集とを糧入の事ハ依る意味方大
事不及) 是と料簡をゆい小凡思ひもあつた向
ち約捕陣取陣(攻り中と火とを) 歌此を氣と奪
依之九根然等津此取陣も後此放火を見て大言表を
控く寺約捕陣(助事なり) 是不謂先之領と奪度)

てまゝとすりとの也是と云く鶴津九根小人教なり
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか
一我を糧と人をは賊に入ふ安くと功をなすか

此の物語とせしめり

武林叢話

永源二年上秋漢信輝荒を豫金入の鶴の園の林
前ゆく菅原小任りる近清園白前久と此下向公言輝
より大和を部少浦上使しりる時園東八別法大系
名列座法時小子兼ふ助國流し小山政種と座法満を
謙信園をひて日子兼ふ座を園東八別法法士れする
座一又小山座を園東八別法法士のゆる座ゆる座と
裁許をりれし事終りし謙信園言即妙の才智也
と天下ゆく巻より

謙信上洛を以て時人教之をたり松永淳正内定也之
好長慶を陳め洛中少小居せし是に大津小居し之時
公方我輝公一字を以て謙信若し時を京虎とりし
上杉憲政は譲りと文とく政虎と号し其夜又輝虎と
改めし幕は致し菊桐二は深之に瓜の紋又細代樂と文
の裏書也免少く復原職を賜ふ永禄二年二月法事之
其年中ハ互京洛中洛外や洛南初大坂堰を造ると見ゆ之
公方家とて好長慶より此をわたり之年中少く好
松永の私法國を振ひ公方を蔑如おすと見ゆ之年中

十二月謙信也帳下下越後一御の時小公方我輝公一潛
小市上六之好松永凍飯法氣さし一お取し是凡一公方
逆ん法京文小りく早く内書之のちハ輝虎池也り之好
松永を謀伐の仕と常一之我輝公也感やと見ゆ之約束も
後之年中有て永禄七年七月廿四日之好長慶河別若江に遊去ハ
ゆも松永淳正并之好一終にお法一終く隠密は公母之
年中法京少長慶遊去法事公方法也年一入我輝公大和
会部を以侵少く越後一之長慶死を仕少方謙信早く
上洛仕松永之好を退治の仕との内書之謙信早速上洛

此又高之原小之好之人庶幾松永岩城等是と云く身
謙信上洛を云く之不可叶ふともあくなき志と達せよ

武徳大成
二月十九日小市所(押寄)義輝公と云く殺す云く

永祿三年庚申今川義元駿州及遠州參州ノ騎兵四萬ヲ率ヒ
テ五月十七日參州池鯉鮒ニ至ル
大神君兵ヲ發シテ

是ニ從フ

家忠日記

織田信長ハ豫メ義元カ軍ヲ尾州ニ出スヲ聞鳴海近邊ニ數
ヶ所ノ要害ヲ構ヘ軍士ヲシテ守ラシメ是ヲ拒カント謀ル
善照寺ノ城ハ依久間左京中嶋ノ城ハ梶川平九衛門尉九根

ノ城ハ依久間大學助鷲津ノ城ハ飯尾遠江守及織田玄蕃九
丹家城ハ水野帶刀柘榴玄蕃頭中村鳴海ノ兩城ハ山口九馬
久父子是ヲ守ル山口頃年信長ニ恨ヲ含事有ニ依テ志ヲ今
川ニ通シテ中村鳴海ノ兩城ヲ義元ニ避渡シ剩ヘ大高沓掛
ニヶ所ノ城山口是ヲ畧シテ義元カ兵ヲ遂ニ城ヘ引入ル
武徳大成
神君翌十八日尾州知多郡阿古屋ノ郷ニ往テ久松依渡守俊
勝館ニ至リ 母君ニ謁シ給フ異父弟三郎太郎因幡守康元
同源三郎豐前守 義勝長福隱岐定勝三人側ニ侍ル 大神君欣
然トシテ吾兄弟寡シ汝等ニ姓氏ヲ與テ連枝ノ好ミヲナシ

三州ニ招テ創業ノ扶トセシト宣フ俊勝命ノ黍キ事ヲ拜謝
シテ薙刀及ヒ海螺ヲ獻ス又俊勝カ家士平野久藏竹内久六
郎ヲ召テ舊勞ヲ謝シ給フ往歲熱田ニ囚レサセ給ヒシ時平
野竹内ノ面士屢母君ノ使トシテ熱田ニ赴テ寒温ヲ候奉
シ、故也此日義元大高ニ至テ鷺津九根西城ヲ拔テ尾州ニ
討入ラント議シテ大神君ヲシテ九根ノ城ヲ攻シム
九根ノ主將佐久間大學急ヲ信長ニ告シム又城中ノ諸士ニ
向テ曰守城ノ騎士僅ニ四百今川カ大兵急ニ攻ハ枯朽ヲ拉
カ如クナルヘシ吾必ス爰ニ死シ各ハ速ニ去テ重テ功名ヲ

立君ニ忠アルヘシト城中武者頭服部玄蕃渡邊大藏本田右
近早川大膳前田隱岐ハ勇悍ノ士也服部進ミ出テ斯急難ノ
時ニ當テ誰カ死ヲ遁レ去ルヘキヤ然レモ坐ナカラ敗レヲ
取シヨリハ城外ニ討出テ無二無三ニ戦死スヘシ萬一天ノ
幸有テ生テ援兵ニ進テ重テ忠戦ヲ致サハ是又武略ノ一奇
也ト云佐久間モ衆士モ最ト同シタリ 大神君石川日
向守家成ニ命シテ軍ヲ三部ニ分テ一軍ハ正兵トメ一旦ニ
進ミ撃テ一軍ハ游兵トシテ機ヲ相テ横鎗ヲ入ヨ一軍ハ麾
下ノ護衛セシムヘシ所謂松平又七郎家廣同七郎同彌九衛

門同主殿助伊忠同右近加藤播磨守景元松平半助同金助酒
井將監小栗五郎九衛門同大六米澤藤藏上野三郎次郎川澄
半七郎赤松日綱之丞同新九衛門天野助兵衛同甚四郎村越
新十郎同九吉赤根彌次郎永見新右衛門勝定青山平大夫近
藤場九衛門青木善九郎川澄文之助川上十左衛門池波之助
同水之助岩成忠七郎平岩五九衛門正廣杵浦藤藏同八郎五
郎勝吉渡邊勘解由九衛門同甚平次吉野助兵衛山口彦八郎
遠山平太夫箕平三郎重忠同牛之助同助太夫正重山本才藏
小野新平村井源四郎平井善次郎黑柳彦内齋藤彦市水野藤

七郎大久保七郎右衛門忠世同次右衛門忠依渡邊源藏重綱
同半十郎政綱同五郎八郎久世平四郎朝比奈五郎伏大切七
藏鳥居四郎九衛門加藤源藏酒井又六柴山小兵衛酒井功之
助足立左馬助蜂屋半之丞大橋傳七郎山本小四郎月晦左馬
助酒井作九衛門大見藤七郎天野太郎兵衛加藤傳十郎大久
保右衛門八近藤傳十郎酒井囚獄等正兵夕リ松平勘解由康
定同玄蕃清善同勘四郎信一同三藏同次郎右衛門重吉本多
肥後守忠真鳥居伊賀守小栗勘兵衛同甚右衛門加藤日綱之
丞中根十三郎村越平三郎同久兵衛同甚五兵衛同左太郎神

原彌兵衛忠政菽田武九衛門赤松彌六郎同彌太郎同藤三郎
押鴨傳十郎山田清七郎山本四兵衛一平加藤小九衛門重常同傳
藏河切孫四郎本多喜藏天野清兵衛足立孫四郎石川善五九
衛門天野傳右衛門景房加藤又藏齋藤喜一郎青山善大夫忠
門久米新四郎八岡彌五郎酒井喜八郎安藤九助筒井與九衛
門土屋甚助重信同甚七郎內藤甚五九衛門善教同四郎九衛
門正成依橋堅之助大橋九馬助石川大八郎同右衛門內藤與
八郎江原孫助本多三九郎淺見金七郎同主殿助三浦平三郎
近藤新九郎黑柳金七郎遊兵夕リ酒井九衛門尉忠次同雅樂

助重忠石川伯耆守敷正同日向守家成本多豊後守廣孝同作
九衛門重次植村出羽守家政高力與九衛門清長天野三郎兵
衛康景阿部善九郎正次平岩七之助親吉同善十郎同新八郎
內藤與三兵衛正次內藤三九衛門信成植村庄右衛門正勝高
木九助廣正新見太郎兵衛今村茂兵衛松平彌九郎忠次江原
孫三郎大竹源三郎朝岡久五郎齋藤彦太郎朝岡新藏山田平
五郎赤根甚五郎天野宗兵衛植村權內鴉殿七郎三郎鳥居鶴
之助同才五郎林藤五郎鳥居又五郎加藤九兵衛同十郎三郎
中根藤藏矢田作十郎大久保四郎九衛門本多甚四郎石川七

郎九衛門同新七郎同新九郎成瀬新兵衛酒井又藏同造酒之
助佐野與五郎内藤孫十郎石川又四郎等麾下ノ護衛タリ

武功實録

右ノ又四郎ハ早足也又弓ノ上手或時 權現様御乘料

ニ逸キ馬有ケルニ此馬又四郎ハ追付可申ヤト御意被成候

得ハ又四郎安キト申上ル 權現様サラハソシヤ

ウソコマテノ内ニテ追付ヨト御意被成御乗出候得ハ又四

郎御馬ヨリ遙ニ先ヘ走り抜先ノ所ヘ行付テ待奉リ居候由

又何レノ城ヤラシ 權現様御攻候時御巡見ノ刻城ノ

兵一人屏ノ上上尻ヲアラハシ出シ手ヲ以テ夕、キ候テ御

目ニ掛候ヲ御覽シテ悪キ躰タラク如何セント御意被成候

得ハ御側ノ面々矢継早キ者ニ射サセラレ候ハニヤト申上

ル然ラハ石川又四郎可然トテ被仰付翌日御巡見ノ節又昨

日ノ如ク尻ヲ夕、ク處ヲ又四郎近々トヨツテ丁ト射落ス

權現様ヲ始メ諸士共ア、射タト感スル聲ノ内城中ヨリ又

四郎カ咽ヲ項ヘ矢先白ク射倒ス 權現様殊ノ外不便

ニ被思召御自身ニ矢ヲ御又キ被成又四郎ヲ小屋ヘ退ケ候

ヘト被仰付候其晚又四郎事ハ定テ可相果ト被成御意候ヘ

ハ何茂丸様ノ沙汰ハ不承ト申上ルサラハトテ御使ヲ被遣

又四郎疵ノ痛ミ候顔色更ニナク數寄ノ象戲ヲサシテ居タ
リ御請ニハ御使黍奉存候矢疵少モ苦ニ不罷成候明日モ可
罷出候共何レ茂留申間一兩日ハ引コミ可罷在ト被申上候
由

武徳大成

石川日向宇酒井九衛門尉二人ハ左右ニ馳廻リテ軍令ヲナ
サシム十九日未明ニ
大神君軍ヲ發シテ丸根ノ城ヲ
攻ム城兵門ヲ開テ馳出ツ
君是ヲ望ミ見テ我ハ大兵
敵ハ寡少也城ヲ守テ防クヘキニ却テ進ミ来ルハ有無ノ一
戦ヲ決セントナリ卒爾ニ戦フヘカラス矢軍ニアイシラヒ

テ間ヲ見テ城ヲ乘取ヘシト宣ヘハ石川酒井其旨ヲ下知シ
ケルニ敵ハヤ我先鋒ヲ交勵戦フ松平善四郎正親同左右衛
門高力親九郎重正寛又藏等戦死ス
大神君團扇ヲ取
テ掛レ々ト勵シ給フ麾下ノ壯士勇士鼓テ追撃ツ高力清長
奥平貞能戦功有敵敗レ走ル追撃テ遂ニ佐久間ヲ切得タリ
我兵進テ城ニ乗テ旗ヲ城上ニ立ツ贅掃部氏信早々城内ニ
入テ駿州ノ別將朝比奈備中鷲津城ヲ拔テ城將定宗ヲ斬ル
義元以爲大高ハ尾州ノ要街也勇將ヲ擇ンテ守ラシメント
左右云ケルハ
元康君丸根ノ城ヲ攻陥シテ勇威盛シ

ニシテ是ニ過タル人アラシト義元則
大神君ヲシテ
大高ノ城ヲ守ラシム

今川義元一朝ニ九根鷲津ノ両城ヲ拔取テ其心益驕出敵寨
ヲ巡見シ以爲蟻蛭撮介ノ地一蹴ニ踏潰サシトテ先鋒ヲ十
町ノ外ニ出シテ自ラ桶狭間ノ山間ニ陣セラル織田信長清
洲ニ有テ仇久間カ報ヲ聞テ大學我ニ先達一一日也ト云テ
即時ニ清洲ヲ護セラル從兵十騎ニ過ス熱田ニ至ル比ニ衆
軍相踵至ル先熱田ノ神祠ニ奉幣メ戦ヲ祈ラル時ニ祠中ニ
金革ノ響キ有信長感激シテ衆ニ告テ曰祠中ニ金革ノ音ア

ルハ明神我ヲ助ケ給フ軍ニハ勝タリト呼リ玉ヘハ衆軍踴
躍シテ勇氣百倍セリ尾州ノ勇士仇々隼人正千秋四郎岩室
長門守先登ヲ志シテ衆ニ先達テ居レリ信長ノ旗頭ヲ見テ
進テ今川ノ先鋒ニ入テ戦死ス前軍其頭ヲ以テ義元ニ示ス
義元彌敵ヲ慢テ尾州ノ兵ハ我軍ニ殲サルヘシ么麼ノ信長
何ソ我鋒ニ當ランヤトテ又敵ヲ心ニカケス酒宴シテ居ラ
シケル

落穂集

之油取を何ひ織田信長、之を余は、其路を率い、園を
東行の万端と仰ぐ、吾思ふも、こゝろ、云と、て、おまけ、旗と、巻

長道具と横とく我元陣不後方の山は是より事は
神と何れは乃とと思雲額より小慶い雪降くして前後
と見ふさるふより我元敵陣をひきあき事と必知間小信長
一夜小旗と名上同く夢と我元陣不陣と目とく
突くと見る今川城を不思議な所なれ大月幸く物事
とも我元ハ帷幕陣内症と不退を物事と不氣とく
戦ふめんとき時小信長は家士股部小平とく一とあり
詮とい我元と案く世の山か——とく我元と力を接く
小平とく膝は節り——と肩をさる如小毛利新助股部と

即けありと修小我元と討くとき首と得たり大ね流小
河井林上ハ駿別林会士孫次小段亡信長は軍勢傍に
宗と是と追討今川家は豪士三浦元馬助赤坂掃部
彦宗元と多入と始め二子小督余人と討取

老人雑話

信長ふま諸やと今川我元を討つ人殺と鳴海り
くぬり我元々首と取——ハ川尻と名傳とくふとの也
後信別とく死すと世傳信長流涙小む礼意——と先
よりありあふ妙算も被るるんを皆負——と推量とく
なりるとと——熱田は神が小旗——ま——と後元めとる神小

て應よりの聲に度有は是別去畧なり叔大毎其降小
馬と進む響をむく人々疎しの志ありき時鞍は赤
備とたゞそと教成其人回五十年の如と幕を――と
人々まよふて押うは我元産子やと兼法念をす
る少く急小切くそり勝利とほり世付我元境四方を
一飯小れし陣とまゝり閑道より陣一をりりる所
七飯堂――く成りりる

續開談

我元戦死時討死せし一信井小田原より小我元の
妹解るり又信長元中も同し一姓名持者ありと云

落穂集

之節 元康公は大方信城小田原陣もり小
水地不中も信元家人信井去く助を授く――と彼
中より八人小川我元中を捕獲回小於く信長は信小
命とそ居る候る今川家持持城の信を悉く明け退
きし如く元中未入信城信小退留あり――と云ふ
形も急小是信一内陣を小田原に中ぬる親類
は好むと云く告知せし有り候し中家申元の信を不中
忠度中越し候小但せし是早く小退留あり候しは小信
陳中しと云ふ 元康公小田原の入りと信はるは信元は

心伝えし我中事と便又増は百揚とハ云ふるは無事と
減田部(陸奥)の菊作並ハ款之能事ハ彼我を欺んり為
小謀斗も能斗世伝信えり深しと云候小切と云ふ
尚陣と明返不致と云武門世傳辱天と世傳菊作並
ふくとも同候と世傳井と擧しと云と尚重信が味
方世傳と云の在冬二例一傳と入屋と云候とて更事
と我元と世傳信世傳本九とは世傳二の九と云成
市原の儀小本九小世傳世傳中元の持口とも世傳傳小
世傳世傳世傳世傳世傳世傳世傳世傳世傳世傳世傳
与居伊知り方より我元討死世傳世傳と具不云と云
三浦上世傳尾探り方よりと我元横死少月面一の儀も
強府之儀知り不中と云と不強成を中上と云候と云
作小て大高世傳と世傳と云成世傳六と助世傳同と云
連是深(伊馬)と云入世道と云と新と小一揆起り世傳
此元元世傳と拂い池部新世傳世傳世傳世傳世傳世傳
之水野信元家来とも云上二揆の留小世傳世傳世傳
如世傳井馬と云を水沖下世傳世傳世傳世傳世傳世傳
高平小取世傳一揆とも云と云は世傳世傳世傳世傳

大樹寺まゝに川返り

岩淵夜話

此中より法批判し我元流り討死す
今川家隆代の侍大將も各居城と明返くは合ふは
元康公御主人世城小は御座るといふ此いふは
とわり只今も織田家より人殺事ありと云は
流るに於ては此世に成りては先織田の大軍と
流るては御座りぬ事小は一戦と云はり
流るては悔い此中世城といふは
元康公は御座りぬ我元の討死も味方の城に
て

て必死に争ふらん云はれ我元好生此討死
元康公御座りぬ事小は一戦と云はり
上はあゝ明返すの一た右と云はり
この御座り今川家此家老を能く
是るも我元もそれいふは
と云はる味方は一た右とも
城と明返す
元康公御座りぬ事小は一戦と云はり
今川家此家老を能く
是るも我元もそれいふは
と云はる味方は一た右とも
城と明返す
元康公御座りぬ事小は一戦と云はり

浅井六郎助小栗太六両人と足尾へ逃ぐるに及小三列
川尾城之水沖下沖をとりて
元康公は毎方城伯父

かり母人城田方少て居る是る如く大言法城を攻め
り小内法と守日は
元康公小内をとりとても流石

伊親法好もといひ織田家法は沙汰也
元康公未

し若中なりといへども一旦法城を攻め味方法後軍

小も不接有るたを歌法中不唯も人踏止り大言法城由右

らり事城小 廣忠法子息得たりとるものくまはら

り元と攻殺と事法たれといふといふと攻めく味方いとい

使えとてし然もい川返りといふ事といふ 元康公

少しも警とありたまてい二の丸ふといふ一内りりり下沖を

方より使えとてし後法白中丸といふ入歌法ありとて

法城の法城の法支度なり然る如く人足備より法後

山田新法なりりりもましく伊級陣を法て法のを法法言中

よる法とて大言法城を法て伊海法法道新也とい一揆

起りて伊道を法る如く山田百助を法法射法法名人法多

法一揆と射拂ひ難あり是法山田百助なり今川家法西とい

と取り起し事小ありと後日小小倉内法と物法り

信長も妻御之殿下中も小治のい

元康ハ我江流ハ杉母安人多クと思ひ付中ニテ

十九小多クせり小治法事ナリ

家忠日記

廿二日恩賞ノ地ヲ淺井ニ賜ル

今度依忠節約束之通無相違可令扶助在所之儀年寄共ヨ

リ可申届者也仍如件

五月廿二日 元康

武徳大成 淺井六之助殿

大神君直ニ岡崎ノ城ニハ入不給軍ヲ大樹寺ニ駐メ給フ事

三日始義元ノ軍ヲ出ス時駿州ノ将士三浦飯尾及岡部カ族

ヲシテ岡崎ヲ守ラシメテ未我ニ還スノ心アラヌ義元死セ

リトイヘ臣押テ岡崎ノ城ニ入給ハサルハ今川氏ヘノ時宜

也 君平生ノ信義多クハ如斯也駿兵ノ岡崎ヲ守ル者

義元敗亡ヲ聞テ城ヲ棄テ逃去於是 大神君捨物ナラ

ハ拾フヘシトテ岡崎ノ城ニ爲入給フ實ニ永禄二年五月廿

五日也 大神君六歳ニシテ岡崎ヲ出サセ給ヒ外ニ在

事十四年天運忽チ至テ今年十九歳舊城ニ還リ入セ給フ親

戚譜代ノ士老少相集テ歡呼喜躍シテ護衛ノ志ヲ奮ハスト

シテ残黨甚臆スト勝ニ乘テ驕ル心滿テ敵定テ枕ヲ泰山ノ
安キニ置キ甲ノ緒ヲ解キ弓ノ絃ヲ弛シテ怠ルヘシ其虚ヲ
窺ヒ不意ニ起テ敵ノ城ヲ競ヒ攻ハ何ソ其一城ヲ拔カスト
云一ノアラシ幸ニ水野藤九郎信近カ守ル處ノ三州刈屋ノ
城ハ駿州ノ飯道也速ニ兵ヲ發シテ此城ヲ陷ント士卒ヲ勵
シ進シテ刈屋城ヲ攻撃ツ岡部カ察ルニ不違信近怠テ城中
微勢也夜ニ入岡部カ與カノ兵伊賀忍ノ士海路ヲ廻テ竊ニ
熊村ノ堀ヲ涉リ城中ニ入火ヲ放テ関ヲ毀ス城兵驚キ駭ク
信近是ヲ拒クトイヘ氏寄手ノ猛勢攻入間信近遂ニ戦死ス

信近カ臣玄蕃允城下ニ在是ヲ聞テ城中ニ馳入伊賀ノ國ノ
住人服部等ノ忍ノ士三十余人ヲ討テ信近カ首ヲ奪ヒ返シ
テ岡部カ兵ヲ郭外ニ追出ス信近カ足下野守信元小川ノ城
ヨリ兵ヲ發シテ刈屋ノ城ヲ拒キ守ル是ニ依テ再ヒ岡部城
ニ入事ヲ得ス軍ヲ卒テ駿州ニ歸ル今川氏真岡部カ忠義武
勇ヲ褒シテ感狀ヲ與ル

落穂集

信近カ二百名勝ハ河海津ヲ控ル所今川家より五番小
張子首のとも候と河海津と右右各津脈は下張府ハ
張海山也 元康公小六浦飯尾と始政より今

と清前をくくはるは武志法方(は作是)は我元勝死
は長終入好の事出夫有信長大利を好油の如也
不意小形をり少小控くハ味方共勝利能ハ不可有ハ
片時もあく出陣あく是吊合戦と遊をよく在る小
たわくくは位一た名次中より少少出陣せし一戦と
信長と少果く我元共遊善に候(一)中名武志法
娘家老く向く一も能く是事在り候中(は作)合戦
ありきとも武志の後を我元討死共以後十方と多し
吊ハ合戦ありは人足とくくを之に止候も

元康と小八早速出陣福と武志武志と出陣共信長
持く春好梅坪共取城を少取圍く外曲偏と出取教一
敵火は武志川に以後後敵府へは侵ると武志我元く市
合戦く後少遊候は武志も武志とくく一ハ家老
く向く少も一系因ハ向くく我元共遊善の
とくくは向くくは武志武志 元康と小八
ありは武志武志武志武志武志武志武志武志武志
武志武志武志武志武志武志武志武志武志武志

武徳大成
大神君兵ヲ發シテ擧母梅坪ノ城ヲ攻又廣瀬ノ城ヲ攻給フ

城主三宅右衛門尉兵ヲ拂楚坂ニ出シテ是ヲ防ク我軍敵ノ
出ルヲ見テ先爭テ進ム城兵高キニ據テ逆撃安達金彌三宅
カ良從林長次郎鳥銳ニ中テ死ス先鋒梢ク折ル
君自ラ衆ヲ勵シテ急ニ撃ツ大森與八郎直ニ進ニテ鎗ヲ合
ス衆復競ニ進ム城兵敗レ走ル北ルヲ追テ勝關ヲ揚テ歸ル
信長織田玄蕃ヲシテ杳掛ノ城ヲ守ラシム
大神君是
ヲ攻テ火ヲ城下ニ縱テ歸ル信長援兵ヲ出シテ我後ヲ蹈シ
ム勢甚銳也大久保新八郎忠俊殿シテ軍ヲ全フシテ歸ル一
日兵ヲ緒川ニ出シテ水野信元ト石ヶ瀬ニ戰松平勘四郎信

一石川新九郎杵浦八十郎鳥居四郎左衛門大久保七郎右衛
門忠世同治右衛門忠佐大原左近右衛門矢田作十郎蜂屋半
之丞大久保新八郎忠俊高木九助廣正太田甚四郎吉勝松井
左近忠次等鎗ヲ合テ戰功有敵鳥銳ヲ放テ忠次カ目ニ中ツ
忠次疼セス進テ其敵ヲ討取ル箕平三郎重成奮戰シテ重疵
ヲ被ル時ニ感書ヲ賜リテ褒セラレ大久保喜八郎忠豊首級
ヲ得タリ大岡助十郎忠次戰死ス明日又水野カ兵ト川屋城
外ニ戰フ其地十八町兩家ノ士或ハ親屬タリ或ハ朋友タリ鋒
ヲ接ルノ際各名乘合テ勵ミ戰フ大久保五郎右衛門忠勝同

七郎右衛門忠世同喜八郎忠豊小笠原新九郎松浦八十郎村
越平三郎石川新八郎太田甚四郎等カヲ竭シテ斬獲ノ功有
松浦村越苦戦シテ死ス兩軍戦疲レテ兵ヲ収テ退又寺部舉
母等ノ城ヲ攻兵ヲ山中ニ發シテ醫王山ノ砦ヲ攻ム久松佐
渡守俊勝先登ス砦兵鎗ヲ以テ俊勝カ肩ヲ刺ス俊勝其柄ヲ
截断テ就テ砦ノ中ニ乘入テ火ヲ放ツ衆兵相繼テ競ヒ登テ
遂ニ其砦ヲ破ル是ニ於テ岡崎ノ勇武日々ニ盛ニ月々ニ顯
ル西三河ノ諸豪其威風ヲ恐レテ歸降スル者日々ニ益多シ
是歲始テ兵ヲ東三河ニ出シテ長澤ノ鳥屋根ノ城ヲ攻ム守

將糟屋善兵衛城ヲ出テ防戦ス今川ノ勇士小笠原藤十郎魁
タリ榊原彌平兵衛忠政衆ニ先逆テ進ミ戦フ者數回

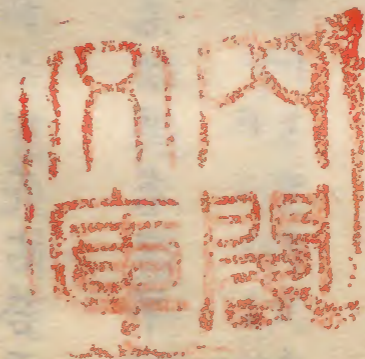
大神君左右ニ問セ給フ今敵ト戦フ者ハ誰ソヤ左右答テ榊
原忠政ナリト申ス 君其勇健ヲ褒シテ其名ヲ早助ト

改メ玉フ一時士林ノ榮ナリ 早介或ハ早介ト稱スト言歎ヲ
討事早ノ速ナルカ如クトナリ

落穂集

今川義元死後其子元就其子元就其子元就其子元就其子元就
元康公ハ其子元就其子元就其子元就其子元就其子元就
目と少と也遠ハ其子元就其子元就其子元就其子元就其子元就
是也其子元就其子元就其子元就其子元就其子元就

子義成清大將ノカキテ織田家小治ノモ感ノ入存
卷ノ下ナリ



武徳成業卷之二終

